技術･家庭科研究主題　「生活の視点でかかわりを生かした授業の創造」（３年次）
「かかわりを生かして力をのばす授業の工夫」（技術分野）
「これからの生活を展望できる学習内容の工夫」（家庭分野）

山主　公彦・赤岡　玲子

１．テーマ設定の理由

生活の視点でかかわりを生かすためには，論理的な思考などの資質をはぐくむだけでなく，様々な場面で人やものとのかかわりを生かしていかなければならない。学ぶ力，考える力などをどのように生かすかという視点で，経済性や現実性などを加えて考えると，技術・家庭科は，それらを生活にかかわらせるために重要な位置を占めていると考えられる。したがって生活の視点でかかわりを生かした授業が必要となる。そこに実践的・体験的な面からかかわりを見いだす活動を取り入れることで，新学習指導要領の目標である生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術の習得を通して，生活と技術とのかかわりについて理解を深め，進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てることができると考えた。また，生活について未来への見通しをもち，勤労観や職業観も含めて考えていく視点も必要ではないかと考えた。そして，それらのかかわりを生かしていく中で，生徒の意欲を高めていく学習を組み立てることが必要と考え本主題を設定した。

技術分野では，かかわりを生かして力をのばす授業の工夫という副題で研究を進めてきた。本校で研究を進めてきた「かかわり」を生かすためには，かかわりを生徒自ら発見し感じ取ることが必要不可欠である。そのためには，単に情報を集め，それを利用するだけでなく，集めた情報をもとに，学習者自らが利用方法を工夫し，生きた知識として再構成していくことが必要である。これらの力を「かかわりを生かしてのばす力」と本研究では位置づけ研究を進めたいと考えている。また，学習したことを書いたり，考えたり，まとめたりすることや，それらを他者に伝える力を育んでいくことで，より効果的な学習成果を上げられるのではと考えている。

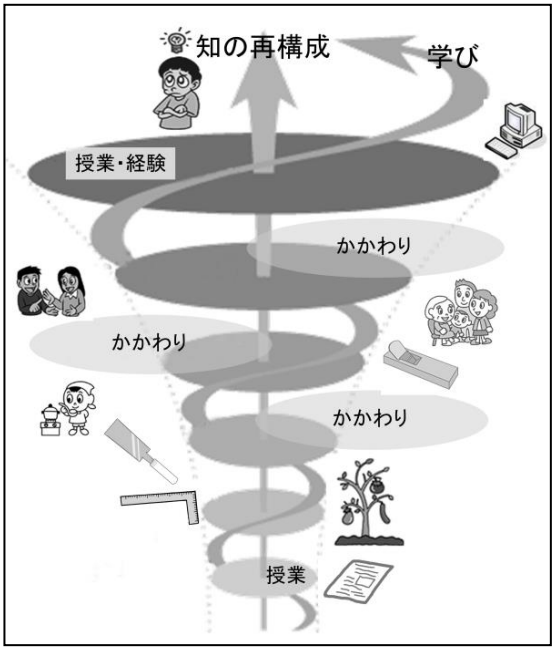


図１　本教科におけるかかわり

新学習指導要領では，ものづくりを支える能力などを一層高めるとともに，よりよい社会を築くために，技術を適切に評価し活用できる能力と実践的な態度の育成を重視し，目標や内容の改善を図るとされている。また，ものづくりを支える能力などの育成を重視する視点から，創造・工夫する力や緻密さへのこだわり，他者とかかわる力（製作を通した協調性・責任感など）及び知的財産を尊重する態度，勤労観・職業観などの育成を目指した学習活動を一層充実する。また，技術を評価し活用する能力などの育成を重視する視点から，安全・リスクの問題も含めた技術と社会・環境との関係の理解，技術にかかわる倫理観の育成などを目指した学習活動を一層充実する，と書かれている。

本研究は，上記のものづくりを支える能力などの育成を重視する視点から，創造・工夫する力や緻密さへのこだわりを追求するために，自らの行動結果を観察，記録，考察させていくなかで，「学びにつながるエラー」から学ぶ力を育て，前述した「かかわりを生かして力をのばす」ことを目標とする。

家庭分野では，平成１７年度より，研究テーマを「これからの生活を展望できる学習内容の工夫」とし，３年間継続研究を行ってきた。その中で，１枚ポートフォリオを題材のまとまりごとに作成し，学習履歴を振り返りながら学習を積み重ねることで，生徒自らかかわりを見いだすことが可能となり，生徒の学習意欲を高め，生活実践力へとつなげることができたことは大きな成果である。さらに，かかわりを見いだすための手だてとして，ウェビング法を用いることで，発想が広がり，様々なかかわりを見いだす方法の１つとして大変有効であることも確認できた。また学びの見取りの１つの方法として，ルーブリック評価

を導入し，ワークシートなどでは見取りにくい実習場面について活用することを検討してきた。そこでは，生徒が自己のレベルをより客観的に自己評価できるように評価項目の具体的な表現を工夫することにより，生徒が自分自身の状況を判断することが容易となり，より多面的・多角的な評価を行うために大変有効であることが示唆された。

また，平成２０年３月に告示された新学習指導要領の中学校技術・家庭「家庭分野」の改善の具体的事項においては，中学生としての自己の生活の自立を図り，子育てや安らぎなどの家庭の機能を理解するとともに，これからの生活を展望し，課題をもって主体的によりよい生活を工夫できる能力と態度の育成を重視している。そこで，本研究では，これまでの研究で積み上げてきた様々なかかわりを見いだすための題材設定や学習法，評価法などを踏まえ，新たな時代の家庭科授業創造に向けて，研究を進めていきたいと考え，本テーマを設定した。

【技術分野】

２．研究の目的

研究目標　　かかわりを生かして力をのばす授業の工夫

⑴研究計画

１年次　かかわりを生かして力をのばす授業の工夫点のあらいだし

２年次　かかわりを生かして力をのばす授業の実践

３年次　かかわりを生かして力をのばす授業の研究の評価

⑵研究の経緯

一昨年から新たな研究目標のもと，本校の研究の柱となる「かかわり」に迫ってきた。１年次にはコンピュータと生活とのかかわりや，コンピュータはどのようなはたらきを持っているかといった内容を学習しながら，コンピュータが生活の中のどのような場面で，どのように利用されているか，その仕組みは何なのか，といったことを，プログラム学習を通して生徒の理解を深めた。そして，自らの生活や体験，これまでの学習とのかかわりを知り，コンピュータの学習において「わかる」・「できた」をより多く導き出せるかを研究の成否とした。そして，研究の結果より，

①トライ＆エラーを積み重ねて学習を進めていくスタイルを取り入れる。

②グループ学習から個別学習への流れを整える。

③個人の学習の成果を全体に還元させる。

に研究を進めることが，より効果的に生徒達の題材への関心・意欲・態度を高めることができると考えた。生徒が「できた」という達成感を得るためには，「できそう」から出発していくことが必要である。そして，生徒が「できそう」から「こうすればできる」までの達成を予感させる変容を「学びにつながるエラー」から読み取り，成功を導き出すために有効活用しながら授業作りに取り組んだ。

２年次には生徒が学習した内容と，もともともっている知識や技能を，学習活動によって新しい知識や技能と組み合わせ，総合的な実践力として実生活に活用できるよう，基礎的な知識と技術を確実に習得させ，組み上げていくことが大切であると考えた。そこで生徒の身近にあり，さらには工夫していくことができるような題材を設定することが必要であると考え，「机引き出しをつくろう」を実践した。本研究でいう「かかわり」とは，さまざまな「かかわり」を，学習から見つけ出し，課題解決に結びつけている力として考えている。「学びにつながるエラー」プリントも活用し，生徒自らが今までの理解していたことや知っていたこと，やってきたことと新たに学んだこととの「かかわり」を意識し，考えることを習慣とし，書き留めていくことを継続させることとした。その結果自らの考えを表現する，他者に伝える，他者から受け取るという活動が定着し，生徒同士の情報交換を活発にさせることで，生徒のアドバイスから問題を発見し，基礎・基本的な事項にかかわるエラーを発生させにくくする授業の実践を行うことができた。

３．本年度の研究　「かかわりを生かして力をのばす授業の研究の評価」（３年次）

～かかわりを生かして力をのばす授業の研究の評価～

これまでも実践してきた題材「机引き出しをつくろう」を見直し，題材としての妥当性と研究の方向性を確認した。昨年度，同題材を利用して授業を行ってきた甲府市内の中学１年生，そして本校で製作を行った生徒達に対して製作品に関わるアンケートを実施し本研究の事前調査とした。

甲府市内中学校一斉アンケート結果より
実施日時　平成21年8月～10月
　実施校数　11校　　対象生徒2.3年生725人（男子55%　女子45%）

「机引き出しをつくろう」において，生徒達の理解力を高めることができているか。授業を通して，生徒達はこだわりを持ち，授業に興味・関心を持つと共に，成就感・達成感を感じることができたか。等について同じ内容のアンケートを学校ごとに行い集計をした。詳細については割愛するが，結果より「机引き出しをつくろう」は，生徒達の技術に対する興味・関心や向上心，そして生徒同士で協力し，完成の喜びを感じるばかりでなく，基礎・基本的の習得に結びつき，この学習が生徒達にとって貴重な経験と感じていることが明らかになった。（図２　アンケート結果Ａ）（図３　アンケート結果Ｂ）

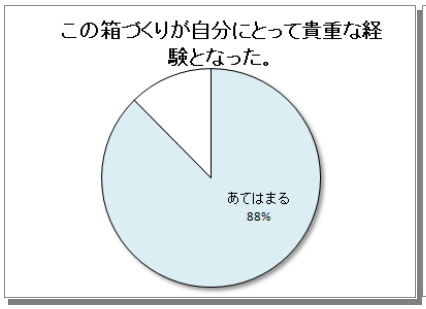


図２　アンケート結果Ａ

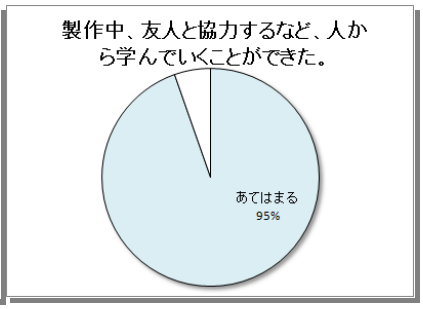


図３　アンケート結果Ｂ

また，アンケート結果（図４　アンケート結果Ｃ）より，本校生徒はこれまでの授業において製図・設計の作業では生徒同士で協力し合い，また「学びにつながるエラー」の活動や，自らをとりまく様々な「かかわり」を意識しながらより理解を深めていたが，のこぎり・切削，かんなどの工具を使用した作業に対しては半数近くの生徒が「難しい」と感じる傾向が高いことが明らかとなった。

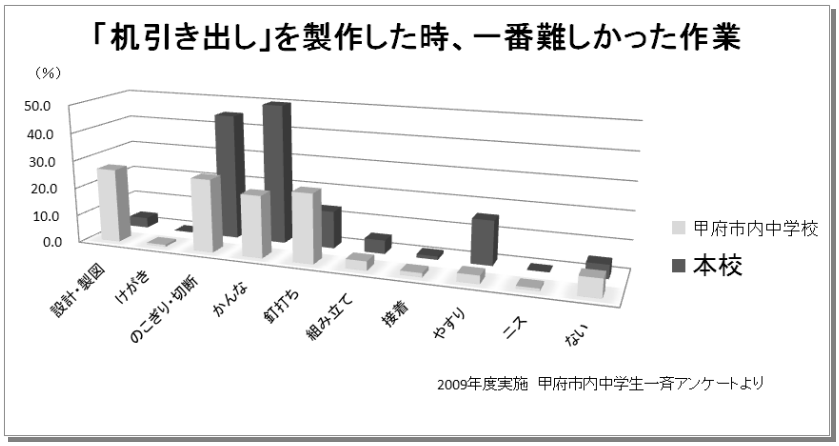


図４　アンケート結果Ｃ

この事を踏まえ，本年度は，生徒達が苦手意識を持つ傾向が高い工具について理解を深め，「学びにつながるエラー」を活用し，エラーを回避・修正するために教師や他の生徒からの情報や自分自身の活動を，整理・分析し課題解決に結びつけ，本校研究の柱となる「かかわり」を追究することを目的とする。また，効果的な師範方法について研究をすすめ，課題解決のための情報をどのように提示することで，生徒自らの行動・活動に効果があるのかを確認する。これらについて分析しながら研究のまとめとした。

４．今年度の成果と課題

これまでの研究では「かかわりを生かして力をのばす授業の工夫」について考え，工夫点をあらいだしていく過程の中で，授業内での教師の師範が重要であることを再確認してきた。技能を生徒に伝える際には，教師の見せ方・進め方によって違いがでてしまう。師範方法をビデオプロジェクターなどを利用するなど提示方法を工夫するなどしてきたが，工具は生徒の目の前で師範した方が生徒の理解度が高く，効果的な面もあることが研究実践後の生徒アンケートなどにより明らかになった。

治具については，ごく簡単な仕組みのものでありながら，のこぎりびき，かんながけ，釘の下穴あけなどといった様々な作業において，効果的，効率的な作業が得られるかを，比較させながら使用させることで，生徒自身が有効性を確認することができた。このことから，比較をして自ら効果的な方法を体験していくことは生徒の創意工夫に繋がる必要不可欠なプロセスであると考えられた。

本校の研究の柱のひとつである言語活動については，自らの考えを表現する，他者に伝える，他者から受け取ることについて，「学びにつながるエラー」のプリントを通して取り組んできた。また，メッセージボードなどの掲示板で交流を図ることもあわせて行うことで，活動の意欲が高められることも確認できた。

生徒同士の気がつきを意識的に学習場面に効果的に取り入れることは，生徒どうしの情報交換が活発になり，基礎・基本的な事項にかかわるエラーを発生させにくくすることができた。生徒のアドバイスから問題を発見できる機会が増え，教師の指導を待つ時間が減り，生徒自身で活動を整理・分析・解決することができ，製作を行う意欲を維持できた。（図５，図６，図７）。

図５　メッセージボード

図６　メッセージボード

図７　メッセージボード様子

「苦手意識を持つ傾向が高い工具」についての研究では，前述の師範方法の工夫や，メッセージボードを利用した情報交換の方法を実践することで生徒の理解度は高くなり，実践後のアンケート結果（図８）において実践前の結果より難しいと感じる割合が大きく減った。このことから，「学びにつながるエラー」だけではなく「かかわり」を活用し製作課題を進めていくことは生徒自身の苦手意識などを変化させるきっかけとなることが明らかとなった。

課題点として研究会等でもあげられた作業としての向上は効果が見られるが，これからの技術科教育としての重視すべき要素に欠ける部分が見られる。より理論と実践と何より生徒達にどのような力を求めていくのか，教師側や研究を行う際の大きなビジョンが必要だと再確認した。来年度に向けての更なる研究が求められる。

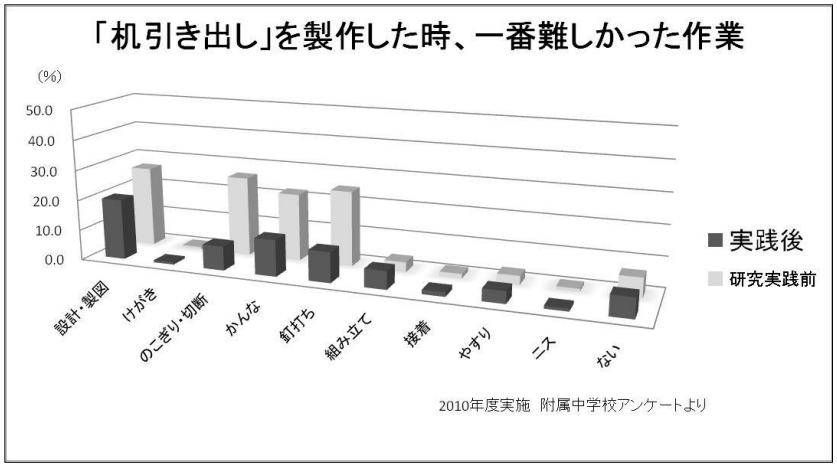


図８　実践後アンケート結果

５．参考・引用文献

中学校学習指導要領解説―技術・家庭科編―平成１１年９月文部科学省
中学校学習指導要領解説―技術・家庭科編―平成２０年９月文部科学省
教科目標，評価の観点及びその趣旨等　平成２２年７月国立教育政策研究所
文部科学省ホームページ(http://www.mext.go.jp/)
技術・家庭学習指導書技術分野　開隆堂
観点別学習状況の新評価基準表　図書文化
中学校　新学習指導要領の展開　明治図書
技術科教育の研究　朝倉書店
技家の科学的な指導　木材加工・金属加工編　開隆堂

６．実践事例　　第１学年４組　技術・家庭科（技術分野）学習指導案（略案）

(1) 日時　　平成２２年１０月２３日(土)

(2) 場所　　技術室

(3) 教材名　机引き出しを作ろう　～のこぎりを学ぼう～

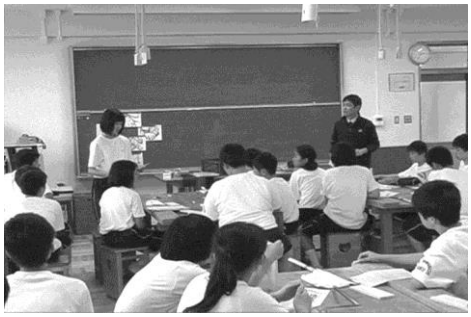
(4) ねらい　より正確な加工の視点を見つけながら適切な切断作業ができる。

(5) 本時の展開

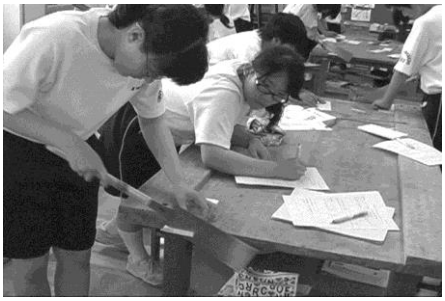
段階	時間	学習活動	教師の指導・支援	備考
導入	10	・本時の目標と内容を確認する。 ○「のこぎりを学ぼう」のプリントを随時記入しながら学習を進めることを知る。 ○ペアとなり，本時の授業を行うことを確認する。 ○ペアの友人の観察を行うことを知らせ，観察記録方法，観察場所を確認する。 かかわりを生かす活動	・本時は，のこぎりのしくみと使い方を学習し，材料取りのけがき線にそって材料取りをすることを知らせる。 ○「のこぎりを学ぼう」のプリントを随時利用させる。 前回の学習をもとにのこぎりの特徴と使用法について確認させる。 ○材料の固定，切りはじめ，切り方，切り終わりについてビデオをもとに理解させる。 ○切断した面の検査法，精度について確認する方法を徹底する。 ○作業に入るので，安全を徹底させる。 ○生徒達の興味・関心を高め，最後まで課題を追求する姿勢を求める。	学習プリント 発問 ビデオ 課題解決のために必要な情報提示 さしがね のこぎり
展開	15	のこぎりを学ぼう　　作業１ ・各自の材料を材料取りのけがき線にそってのこぎりびきをさせ，材料取りをさせる。 ○一人は一つの部分のこぎりびきを行う。 ○確認のためにさしがねを使用する。 ○ペアは作業を観察し，優れていると感じるところ，修正した方がよいところをプリントに記入する。 かかわりを生かす活動	・安全に作業ができるよう確認しながら机間巡視 ○　のこぎりの使用法が間違っている場合は指導する。 ○　ペアの作業を観察し，記録していくことができているかを徹底させる。 ○　さしがねでまっすぐに切れているか確認する。	学習プリント
	10	・プリントの内容を確認し，観察者がどんな意見を持っているのか自分と比較する。 かかわりを生かす活動	・発表を聞くことを徹底 ○　安全に配慮し，全ての作業は中断する指示をする。 課題解決のために必要な情報提示	学習プリント 発問

	15	のこぎりを学ぼう　　作業２ ・各自の材料を材料取りのけがき線にそってのこぎりびきをさせ，材料取りをさせる。 ○一人が一つの部分のこぎりびきを行う。 ○観察の発表を聞き，自分ののこぎり引きを修正する。 ○ペアは作業を観察し，優れていると感じるところ，修正した方がよいところをプリントに記入する。 かかわりを生かす活動	・安全に作業ができるよう確認しながら机間巡視 ○　のこぎりの使用法が間違っている場合は指導する。 ○　作業１から修正しようとしているか確認し，プリントに記入させる。	学習プリント
まとめ	15	本時で考え，記入したことを発表する。 「のこぎりを学ぼう」のプリントに本時の感想を記入する。 次回の授業について知る。 ・　掃除と工具の片付けを行う。	本時の授業で考えたことを発表させる。 まとめる時間をあたえる。 次回の授業について知らせる。 ・　掃除と工具の片付けを徹底させる。	学習プリント

のこぎりを学ぼう　　作業１様子



技術向上のかかわり



のこぎりを学ぼう　　作業２様子

【家庭分野】

２．　これまでの研究経過

平成１７年度～１９年度　「生活の視点でのかかわりを見いだす，技術・家庭科の指導」
平成１７年度　　１年次　生活の自立を支援する学習内容の工夫と評価①
平成１８年度　　２年次　生活の自立を支援する学習内容の工夫と評価②
平成１９年度　　３年次　生活の自立を支援する学習内容の工夫と評価，成果と課題
平成２０年度～　　「これからの生活を展望できる学習内容の工夫」

３．今年度の研究内容

新学習指導要領への移行期１年目であった昨年度は，まず「Ａ　家族・家庭と子どもの成長」において，それまで興味・関心に応じた内容であった「幼児との触れ合いとかかわりの工夫」「高齢者などの地域の人びととのかかわり」が，すべての生徒が履修する内容に改められ，さらに家族関係や幼児の生活に関する課題選択学習が設けられたことを踏まえ，「Ａ　家族・家庭と子どもの成長」の実習題材を扱った。

研究を進めるに当たっては，生徒の記述を中心とした事前事後調査とともに，授業ごとに「振り返りカード」による記述を積み重ね，それらの質的データを分析するという，質的研究法を取り入れた。

質的研究は，“何を”“どのように”という現象それ自体を志向する問い（質的な問い）に対して有効な研究方法とされ（澤田・南，2001），その場に生きる人々にとっての事象や行為の意味を解釈し，その場その場のローカルな状況の意味を具体的に解釈し構成していくことを目指すものである。したがって，厳密に定義された既に決められた概念から出発するのではなく，問題をおおまかに示す自由度の高い「感受概念」を出発点とし，そこから個別具体的な記述による発展をねらうものである。つまり，実証データからその概念に新たな面がつけ加えられ，理論がつくられる。データ収集と理論形成や何を問うかの明確な追求が同時に行われるというのが大きな特徴である（秋田，2007）。本研究は，新学習指導要領における新たな授業開発を目指すものであり，したがって，質的な検証を丁寧に行うことは，これからの家庭科授業を創造するための手がかりになると考えたためである。

生徒の振り返りカードを用いた質的分析の結果，昨年度の「幼児との触れ合い交流学習」は生徒にとって難易度の高い課題であったが，その分達成感が大きく豊かな学びの場となったことが明らかとなった。また，山梨大学教育人間科学部家政教育講座４年・岩瀬玲奈は，卒業研究において，本校における「幼児との触れ合い交流学習」について，中学生，附属幼稚園教諭，附属幼稚園保護者を対象に調査を行った。それにより，生徒だけでなく，授業に参加した幼稚園教諭からのコメント，参加した保護者のコメントやその後の幼児の様子なども質的に分析・検証することができた。

今年度は，昨年度の研究から多面的に得られた成果と課題をもとに，Ａ領域の全体計画を見直すとともに，生徒がこれからの生活を展望し，課題をもって主体的によりよい生活を工夫できるような授業開発を行う。また，まとめの年度である今年度は，評価についても検討を加え，新学習指導要領におけるこれからの研究の方向性を探っていきたいと考える。

４．実践事例　　第２学年１組　技術・家庭科（家庭分野）学習指導案（略案）

（１）題材名　「子育て中のお母さんから学ぼう」
（２）ねらい　・子育て中の母親の話を聞き，子育ての喜びや苦労，親の願いに気づくことができる。
　　・幼児に対する具体的なイメージを持ち，これからの幼児との交流に生かす視点を挙げることができる。
（３）本時における評価の計画

規準	十分満足できる状況	おおむね満足できる状況	努力を要する生徒への支援
関心意欲態度②	◎子育てについて関心を持ち，質問をしたり，幼児と積極的に触れ合おうとしたりするなど，意欲的に関わろうとしている。	○子育て中のお母さんの講話を聞き，子育てについて関心を持ってかかわろうとしている。	△講話の内容を聞いてメモを取るように促し，前時に考えた質問を思い出させる。
工夫	◎ゲストティーチャーから学	○ゲストティーチャーから	△前時の学習，これから行う幼児

創造①	んだことを，これからの幼児との交流に生かすための工夫を複数の視点から具体的に考えている。	学んだことを，これからの幼児との交流に生かすための工夫を考えている。	との触れ合い学習と，自分自身とのかかわりを考えさせる。

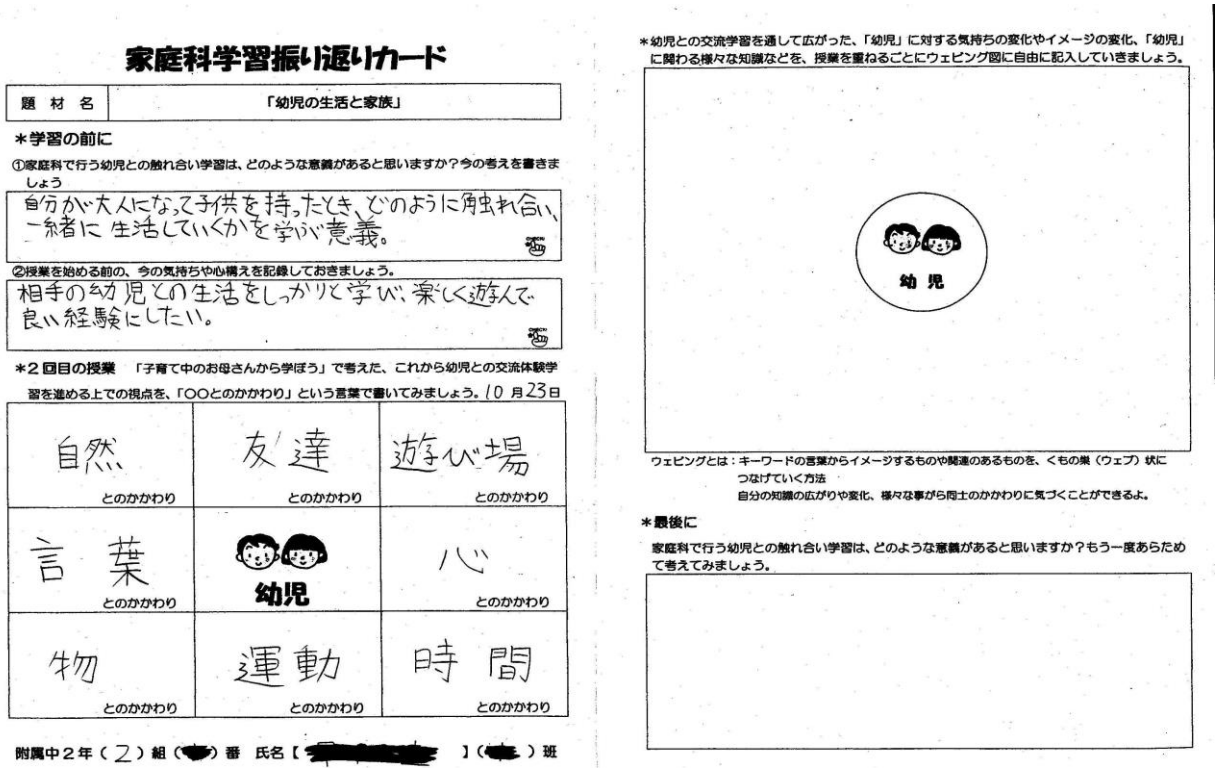
（4）展開　　「子育て中のお母さんから学ぼう」

邂	学習活動及び生徒の活動	教師の支援	指導上の留意点・評価
事前の準備	・ゲストティーチャーへの質問事項を考えておく。（前時） ・手洗いを済ませておく。	・ゲストティーチャーとの打ち合わせを行う。 講話内容について 予想される生徒からの質問事項 授業の流れ　　など	・学習形態の工夫 （身近に触れ合える工夫） ・ゲストティーチャー用の椅子等の準備 ・衛生面には十分に留意する。 （教室の衛生，生徒の手洗い）
課題の把握 5分	①学習内容の確認 前時の学習内容を想起し，本時の学習内容，目標を確認する。 ②ゲストティーチャーとその子どもを迎える。 ・拍手で迎える。	・本時の学習内容，目標を確認させる。 ・簡単にゲストティーチャーについて紹介する。	・ゲストティーチャーとその子どもは，来校したら家庭科研究室に入って待機している。 ・ワークシート配布 （前時に質問事項を記入したもの） ・クリップボード
課題の追求 35分	③ゲストティーチャーによるミニ 講話（20分） 「子どもを産み， 育てるということ」 ・メモを取りながら講話を聞く。 ④ふれあいタイム（15分） ・ゲストティーチャーに質問しよう ・子どもと触れ合ってみよう ・感想を発表しよう ・ゲストティーチャーとその子ども にあいさつを行う。	・映像や写真を見せながら，次のような内容で話をしていただく。 ○自己紹介 ○出産のときの様子や気持ち ○名前の由来 ○子どもの成長の様子 ○毎日の生活 ○子育ての喜びや苦労 ○父親の役割 など ・事前に考えておいた質問を各班から出すようにする。 ・子どもとの触れ合いは，子どもの様子を見ながら無理のない範囲で行う。 ・クラスの代表者によるお礼のあいさつ ・ゲストティーチャーとその子ども退室	・プロジェクター， ノートＰＣ テレビ，ビデオの準備 ・講話中の子どもの様子に注意し，必要に応じて補助を行う。 ・講話の流れに合わせて適宜ビデオをＯＮ，ＯＦＦ 【評価】（関・意・態）② 観察 ワークシート ・２人は家庭科研究室へ
ま	⑤ミニ講話を聞いての感想をまとめ，発表する。	・数名に発表させる。	・ワークシート

と め 10分	⑥これからの学習（幼児との交流） に向けて，本時の学習をどのように生かしていけるか，視点を考える。 ・ワークシートに記入する。 ・発表する。 ⑥振り返りカードに，本時の授業の感想記入（表面）および，ウェビング図への記入（裏面）を行う。 ⑦次時の学習内容の確認	・14年前の自分，14年後の自分についても考えさせる。 ・これからのおもちゃづくり，幼稚園訪問，幼児とのおやつ作りに向けて，どのような視点をもって臨むかを具体的に考えさせる。 ・数名に発表させる。 ・班ごとに回収する。 ・次時は，幼児の心身の発達について学習することを確認する。	【評価】（工夫創造）② ワークシートの記述 発表 ・振り返りカード

【授業の様子】

【振り返りカードの記述】



家庭科学習振り返りカード

題材名	「幼児の生活と家族」

＊学習の前に

①家庭科で行う幼児との触れ合い学習は、どのような意義があると思いますか？今の考えを書きましょう

自分が大人になって子供を持ったとき、どのように触れ合い、一緒に生活していくかを学ぶ意義。

②授業を始める前の、今の気持ちや心構えを記録しておきましょう。

相手の幼児との生活をしっかりと学び、楽しく遊んで良い経験にしたい。

＊2回目の授業　「子育て中のお母さんから学ぼう」で考えた、これから幼児との交流体験学習を進める上での視点を、「○○とのかかわり」という言葉で書いてみましょう。10月23日

自然 とのかかわり	友達 とのかかわり	遊び場 とのかかわり
言葉 とのかかわり	幼児	心 とのかかわり
物 とのかかわり	運動 とのかかわり	時間 とのかかわり

附属中2年（2）組（[redacted]）番　氏名［[redacted]］（[redacted]）班

＊幼児との交流学習を通して広がった、「幼児」に対する気持ちの変化やイメージの変化、「幼児」に関わる様々な知識などを、授業を重ねるごとにウェビング図に自由に記入していきましょう。

幼児

ウェビングとは：キーワードの言葉からイメージするものや関連のあるものを、くもの巣（ウェブ）状につなげていく方法
自分の知識の広がりや変化、様々な事がら同士のかかわりに気づくことができるよ。

＊最後に

家庭科で行う幼児との触れ合い学習は、どのような意義があると思いますか？もう一度あらためて考えてみましょう。

＊毎回の授業を終えて、わかったこと、気がついたこと、心に残ったこと、疑問に思ったことなどを記録しましょう。

時間	授業日	学習内容	授業の振り返り
1・2	10/18	生命の誕生と私たちの成長	子どもが奇妙のような姿から、生まれるまでのビデオを見ました。私たちもこうして生まれてきたのだと思うと、とても感動しました。小さい中に生まれた命ですが、2日で成長してしまう人間にはすごい力があるのだと感じました。
3	10/23	子育て中のお母さんから学ぼう	この、ゆう講師を聞いたのは初めてだったので実際にお母さんをしている人から話をきけてよかったと思います。1才でも日々成長していることがよく分かりました。私自身も生まれたときのことをきいてみたいと思いました。
4	10/30	幼児期の心身の発達	小さいときにやっていたことエピソードを思い出していろいろなことが思いうかんできました。小さくても感情があり、悲しかったりうれしかったりあったと思います。感じていたことは今も変わらないなと思いました。
5	12/6	幼児期の遊びと成長	1歳児がかがりだけども、できる遊びが難しい遊びと大きくちがうことが分かりました。私たちは年少のクラスなので年に応じたたのしいおもちゃを作っていけるといいです。
6	12/13	幼児の喜ぶおもちゃを作ろう①	魚をどれくらいリアルにかけばよいのか迷いました。今回はリアリティのある魚にしました。魚釣りと同時に、魚の名前や特徴も覚えてもらえるといいと思いました。
～	1/17	幼児の喜ぶおもちゃを作ろう②	幼児なので集中を持続するというのはむずかしいかなと思ったので動いた個数で決めることにしました。ルールの工夫をしていかなければならないと思うのでしっかりと考えたいです。
10	／	幼児の喜ぶおもちゃを作ろう③	
11・12	／	【幼稚園訪問】幼稚園で幼児と遊ぼう	
13・14	／	幼稚園訪問を振り返ろう	

時間	授業日	学習内容	授業の振り返り
15・16	11/1	幼児期の食生活の特徴とおやつの意義	プリンで実際に調べてみて、普段は熱量と値段しか見ていませんでしたが、しっかりと内容を見る必要があると思いました。おやつもしっかりと栄養素のバランスを考えて選びたいです。
17・18	11/15	幼児のおやつを作ろう	かぼちゃとにんじんとほうれん草でつくりましたが、とてもカラフルでかわいいと思いました。さら切りを工夫すればよくなると思います。
19・20	／	おやつ作り交流会の計画を立てよう	
21・22	／	【おやつ作り交流会】幼児と一緒におやつを作ろう	
23	／	交流会を振り返り学習のまとめをしよう	

幼児との触れ合い交流学習を通して自分の気持ちの変

月日	尺度 / 交流内容	幼児に対する気持ち 大好き 6	好き 5	どちらかといえば好き 4	どちらかといえば嫌い 3	嫌い 2	大嫌い 1	幼児との交流学習に対する 全く不安はない 4	それほど不安はない 3	少し不安で 2
10/4	(事前調査)学習の前に	6	5	4	3	2	1	4	3	2
10/23	子育て中のお母さんから学ぼう	6	5	4	3	2	1	4	3	
1/24	幼稚園でおもちゃで遊ぼう	6	5	4	3	2	1	4	3	
2/7	幼児と一緒におやつを作ろう	6	5	4	3	2	1	4	3	

【分科会より】

家庭科分科会は、現場の先生方、大学関係者、協力員の先生方など 14 名の参加があり、次のような指導をいただいた。

・講話の内容がわかりやすく、「これからを展望する」意味でも効果的であり、知識として、生徒によく伝わっていた。幼児が「苦手」と言っていた生徒も、言葉ではない、おやつづくり、幼稚園訪問につなげていける「かかわり」をもてるのではないかと思う。幼児とかかわりを持つとき、親もそうだが、言語的なかかわりがほとんど。しかし、子どもには通じない。言葉ではない「かかわり」のあり方（例えば、幼児に共感する、身体的に同調するなど）を中学生から学んでいくことがとても大切である。物理的に難しい場合は、関わっている姿（おもちゃを使ってあやす、食べさせる、寝かせる、など）を見るだけでもよい。（田甫先生）

・子育ての楽しさが前面に出ていてとてもよい講話だった。話の中に父親のかかわりもあり、男子も興味を持って聞けた。幼児がぐずったり、あどけない表情や仕草をして、本物の体験の大切さが確認できた。家庭科では、体験以外の時間はほとんど覚えていないと言われる。今日の授業はきっと子どもたちの心に残るだろう。家庭科では、時間軸、空間軸を広くもつことが大切であるが、昔、今、将来を考え、いろいろな視点からかかわりをみることができた。「家に帰ったら、聞いてみてね。」という投げかけもあり、親に対する感謝の気持ちも出されていた。このような授業を行ったとき、必ず数字で残せるように尺度をとることが大切である。（志村先生）

・幼稚園と中学校の家庭科は、つながりが強いと感じている。保育園では、最近「ままごと」が成立しなくなった。兄、姉は登場するが、父母が登場せず、「ごっこ遊び」はキャラクターものばかり。子どもたちの中の「家族」が変わってきているのだろう。そのことからも、家庭科は大事、と感じる。これからも将来を見据えて、協力して一緒にやっていきたい。（武川先生）

・附属中の生徒は、家庭的にも恵まれた環境にいる生徒が多く、かわいがられ、何でもやってもらえたり、与えられたりしている。そういう実態からも、「自分が何をしてあげられるか。」を考えることができる、この交流体験はとても意義があると言える。本時の授業では、親の視点が見いだしやすかった。パワーポイントも上手に項目立てができていてよくまとまっていた。これからの課題がつかみやすかっただろう。前期→プレ授業→公開と、どんどん授業が改善されていて、やはり研究を重ねることはとても大切であると感じた。発問の仕方、進め方など、研究したことが子どもたちに還元されていく、今までの成

果がでていた研究授業だった。（清田先生）

・家庭科で保育を学ぶ意義は２つある。ひとつは「人間の育つ過程について理解すること」もうひとつは、「子育てと環境について理解すること」である。そして、小学校、中学校、高等学校、それぞれねらいがあるので、その全体の流れを理解することが求められる。子どもの発達によって扱い方もかわるので、ふさわしい方法や内容をきちんと押さえていることが大事である。小学校、中学校、高等学校の授業の中身をお互いに共有し合うこと、教師個人の修養も大切となる。保育の授業は、プライバシーの問題もあり、苦情が来ることもあるかも知れないが、プロとして、果敢に挑戦していって欲しい。そのためには、きちんと、たゆまぬ研究を重ねて行くことが大事である。そうすれば、地域の中で、個人の中で、時代にあった授業を創り上げることができる。今回のＧＴは、親としても、ＧＴとしても、とても成長している姿を見ることができた。このような人材を見つけることはとても難しいと思うが、情報をストックして、地域で共有していけるとよい。ＧＴも、話してよかった、来てよかったと思えるような、やり甲斐を感じてもらえるような授業を作っていくことが大切である。今年度から、教職大学院がスタートし、理論と実践が融合した教員の育成を目指している。それを体現できるのが、こういう実践研究の場である。現場にいると、どうしても実践が先行してしまうが、もっと理論を学ぶべきである。このような研究会に参加する現場の教員が少ないことが非常に残念である。（永田先生）

５．まとめと今後の課題

３年間のまとめとなる今年度は、昨年度に引き続き幼児との交流学習を研究対象とした。また、全体計画を見直し、題材全体について検討することができた。

新しい学習指導要領では「幼児との交流」が必修となったが、実施に当たって中学校現場では様々な悩みを抱えている。昨年度は附属幼稚園と連携し、幼児を中学校へ招いてのおやつ作りを行ったが、公立中学校に勤務する先生方からは、附属中のような恵まれた環境がないため、なかなか実践が難しいというご意見を数多くいただいた。そのような現状を考えると、今年度行った「子育て中のお母さんから学ぼう」といったＧＴを学校に招いての実践は、幼稚園や保育園との交流が難しい中学校でも無理なく実施することができ、実現可能な提案性のあるものとなったと言えるだろう。

また、昨年度行ったように「振り返りカード」を用いた授業の質的分析を今年度も行う予定であるが、今年度は公開研究授業が 11 月であったため、まだデータ収集が完了していない状況である。2 月の校内研究会でデータ入力作業を行い、その後質的分析を行う予定である。また、尺度調査についても山梨大学と連携を図りながら合わせて分析していきたいと考えている。これらの分析結果については、適宜ホームページ上にアップしていくこととする。

家庭科は、今年度も様々な機関と連携を図りながら、充実した授業研究を行うことができた。これからも理論をしっかり学びながら、これからの時代に合ったよりよい授業を創造するために、新しいことにも果敢に挑戦していきたいと思う。

【参考・引用文献】

「中学校学習指導要領解説―技術・家庭科編―」　平成２０年９月　文部科学省
「これからの授業に役立つ新学習指導要領ハンドブック　中学校技術・家庭科（家庭分野）」
河野公子　他　平成２０年７月　時事通信社
「月刊家庭科教育　７９巻　３号」　平成１７年３月　家政教育社
「はじめての質的研究法　教育・学習編」　秋田喜代美　他　編著　平成１９年７月　東京図書